有機的なものについての考察と表現

大桃　洋三
大学院造形研究科修士課程修了　工芸デザイン

1　これまでの経緯

私は無機物である金属によって有機的な表現がしたいという思いから金属を用いた鋳造技法によるものづくりを行ってきました。

2　コンセプト

一年次には「変化」「生命力」「匂い（気配）」をキーワードとし、生物の形態をモチーフとした抽象表現を模索してきました。ですが、それでは観る人に対して伝えたい事が間接的にしか伝わらないため、今回は表現内容がより直接的に伝わる方法を模索しました。

私が強く惹かれるものに出会った瞬間に起こる「匂いの体験」から新たな表現を模索する事で、それが可能になると考えました。その「匂いの体験」とはモノの存在が空間の空気の密度をぐっと上げ、そのために「匂い」のようなものを感じた経験です。その瞬間、空間全体がモノの内部世界へと巻き込まれていくうねりとモノが解体・開放されていく広がりの中にいるように感じます。修了制作ではその感覚を表現する事に挑戦してきました。

3　制作について

制作ではその過程で起こる鋳造欠陥などの外部的要素を自分のイメージの型に押し込め修正するのではなく、逆にイメージの型を広げ外部的要素を内なるものとして活かしました。つまり、物事のマイナス面を観るのではなく、こちら側が視点を変え、プラス面として捉えていく事で、双方にとって良い方向性が見つけられると考えました。それによって、作品の世界観に広がりが生まれました。

タイトルの「ヒダ」はモノは襞のような存在であると考え、このタイトルにしました。モノが襞であるとすると、その奥に隠されているものこそが「匂い」なのです。その不可視な存在である「匂い」を暗示させる表現を追求していきたいです。また、それがものづくりのひとつの役割でもあると感じています。

4　最後に

手仕事によるものづくりは経験でしかわかり得ない事が数多くあると改めて実感しました。経験とはその人しか獲得し得ない生きた情報であります。それがモノに深みを与え、より立体的な表現として血の通ったものにします。しかし、経験は他者と共有できないため観る側にとっては関係ない事と考えるかもしれません。ですが、ここで問題とすべき点は経験の共有ではなく、対象から発せられるものを見出し感じ取る事にあります。それが私たちの視点を複合化し、私たちの行為には幾分かの広がりをもたらせるでしょう。そのようにしてモノと人間の関係を新たに築けた時、モノはただの物質という存在を超えて、「有機的なもの」として存在する事が可能になるのではないでしょうか。

タイトル：「ヒダ」
サ イ ズ：h 1000
　　d 700
　　w 1200（mm）
素　　材：砲金